

女性学の発展と現代的課題

千田有紀 SENDA Yuki

- 1 — 女性学の誕生
- 2 — リブの新しさ
- 3 — 女性学とは何か
- 4 — 女の論理とは
- 5 — 現代的課題

1 — 女性学の誕生

日本において、「女性学」という言葉が作り出されてから、30年以上が経過しました。もちろん、江戸時代の「女大学」をもちだすまでもなく、女についての言説はあまたあって、女については多くのことが——女はこうすべし、女はこうあるべきという規範のレベルで——語られてきました。しかし「現実の女」（というものが仮にあるとして）はどのようなものであり、規範としての「女」がどのように作られているのかについて、反省的に捉えかえされはじめたのは、長い歴史のなかでは最近のことです。

トマス・クーンにならって、学問を支える制度のひとつとして学会をあげるとするならば、日本女性学研究会、国際女性学会、女性学研究会、日本女性学会など「女性学」という名前のつく学会が創設されていくのは、1970年代後半以降のことです。書籍のレベルで、「女性学」という名前が出現し始めるのは、富士谷あつ子さん編『女性学入門』（1979）、岩男寿美子・原ひろ子さんの『女性学ことはじめ』（1979）、井上輝子さんの『女性学とその周辺』（1980）、『女性学をつくる』（1981）など、1980年前後です。

しかし、女性学が成立するにあたって一番大きな役割を果たしたのは、井上輝子さんによる「女性学」の定義だと思います。井上さんは女性学を、「女性を考察の対象とした、



女性のための、女性による学問』であると宣言しました。井上さんは「女性学」を、考察の対象を女性であり、また担い手は女であり、さらに女性解放という目的をもつ学問であると定めたのです。まるでリンカーンみたいなこの定義を知ってどんな怖いひとだろうと勝手に井上さんを想像していたら、このように穏やかなお人柄のひとで驚いたんですが(笑)。このように対象、担い手、目的を明確に入れ込んだ女性学の定義は、その後さまざま論者によって引用され続けることによって、女性学はどのような性質の学問であるべきかという方向づけをしたとっていいとおもいます。さらに反論もまた論争を喚起します。「女性学」がどのようなものであるのかを論じることこそが、「女性学」の営みともいえるのであるから、そういう意味でも、優れた定義であったことは間違いがないと思います。

さらにつけくわえれば、井上さんが「女性学」を定義づけたことのもうひとつの意義は、女性学とウーマン・リブを理念的に接合したことにあります。井上さんは女性学を創設したさいの事情を、『女性学とその周辺』で以下のように書いています。

ウーマン・リブの高揚があつて、次に女性解放の社会的実践運動があつた。そしてこの運動が、女性解放に、ゆるぎない社会的地位を付与したことは事実である。けれども、私にはこうした運動に、リブの孕んでいた可能性のすべてが解消されうとは思えない。たしかに、外に向って自らの正しさを主張することも必要である。けれども、そのことは同時に、内に向かって省ることもなければならない。さもなければ、リブ運動は従来の婦人解放運動と変るところがないだろう。私は運動にも関心をもつた。けれどもそれ以上に女性存在そのものへの探求を深めたかった。そうした探求の作業もまた、広い意味でのリブ運動の一環であると考えた。

実際に女性学を創設しようとしたメンバーのなかに、リブの運動実践を熱心におこなっていたひととはそれほど多くはありませんし、実際にリブと女性学の担い手にかんしても、連続性はあまりありません。残念なことではありますが。また、女性学を志す学者のすべてが、リブに全面的に賛同していたわけでないです。しかし、1975年の国際婦人年以降に典型的にみられると考えられる女性運動（もちろん、国際婦人年をきっかけに行動を起こす会もリブの実践ですが）を、リブ以前の権利獲得型的女性運動とは異なった、内省的な解放実践として女性学を位置づけたうえで、リブの運動の一環としたことの意義は大きかったと思います。井上さんはいわば、リブと学問である女性学をつなぐ結節点の役割を果たしているのです。

2——リブの新しさ

ウーマン・リブがそれまでの女性運動と違うことは、まず女性をたんなる被害者として

位置づけたのではなく、このシステムを再生産する主体として位置づけたことにあります。それまでの女性運動、例えば母親運動などは母という役割にもとづいて、女性運動を展開しました。がしかし、リブは女性が専業主婦として抑圧されているとしても、また家事や育児をこなして夫を支えることによって、資本主義を支えて再生産していくことを指摘しました。女性をシステムのなかに位置づけたのです。

また女性運動のなかで、国民国家を批判の対象として措定したことが新しかったと思います。与謝野晶子と平塚らいてうらのあいだで闘わされた母性保護論争も、国家による保護をどう考えるかという問題でしたが、結局与謝野が提起した「国家に保護されることの胡散臭さ」のようなものは、答えが出ないままおしまいになってしまいました。リブはこの国民国家批判に切り込んでいったのです。

さらに「生産性の論理」の批判、資本主義をシステムとしてとらえ、国家システムと共謀しながら働いている論理を批判したことがあります。このシステムのなかで女性がシステムを再生産する主体となっていることを批判していることは先ほど述べました。この場合権力とは、国家によって直接的に振るわれるものではなく、もっと巧妙に、わたしたちの日常生活を貫いて作用するなものになります。

1990年代に江原由美子さんは、ウーマン・リブにブルデューやギデنزなどの「新しい社会理論」の萌芽を見出していて、とても面白かったのですが、リブを今日的にもう一度読み直すことはとても興味深いと思います。

3 — 女性学とは何か

それでは、「女性学」とはいったいどういうものであるべきなのかについて、創設に井上さんがかかわった女性学研究会編による『女性学をつくる』に依拠しながら検討してみたいと思います。

まずは、学問の対象として「女」を選んだことが新しいということがあるということがあります。といっても、女だけを学問の対象として取りあげると言う意味ではないのです。女を対象とした学問としては、井上さんが否定的にとりあげる巖本善治の「女学」も、女を対象にしていたりしますから。

そうではなく、女性学が「女性を対象とする」という場合、既存の学問において女性がまったく顧みられてこなかったことに対する方法論的な批判の意味があります。たんに、女を学問の対象とするということを超えた問題を提起しているのです。

女性を対象とすることが、学問の方法論的反省を伴うというのは、例えば女性を階級分析の対象とすることは、女性の地位を父や夫に従属させて分析して本人の教育・職業・収入を無視してきたことや、分析の単位を家族とし単身者を外しておおくの女性の高齢者が、社会的位置づけを失ってきたことの批判を伴います。これは女をたんにデータとしてつけくわえればすむ問題ではなくて、女という対象を入れることによって、「階層」とは何なの

かという定義と、階層を分析するさいの方法の再定義を迫るものになります。

次に、女のための女性学について検討したいと思います。女性学の目的が、女の解放のためであるといえば、あたかも解放という目的のために、学問を従属させてしまうかのような錯覚をもたらすかも知れないけれど、それは間違っています。

井上さんは、女性解放運動から現われてきた女性学が、女がなぜ男とは違う立場におかれているのかを分析することによって、個々具体的な運動の過程では運動と学問が一致することがなかったとしても、長い展望のなかで最終的に、女性学が女性解放の助けになるといっています。

最後に、担い手にかんしては、井上さんが女性を女性学の担い手として女性を想定した理由は、今まであった「女学」などの男性の手による啓蒙的な婦人論——性別役割分業を否定せず、国家の視点から論じられてきたような男性の手による女性論——とは一線を画したい、女性が女性学をおこなうことによって、自分自身の解放につなげるということがありました。

男性ももちろん女性学の視点をもち得るけれども、幼児期からみにつけた「男らしさ」を取り払うために、女性以上の大変な困難と努力を強いられると井上さんは指摘しています。男性が女性学の取り組む作業は、自分の立っている男性の秩序や価値観の対決を強いられるのではないかということです。

また女性は、女として、また人間として生きにくい状況におかれているからこそ、労働や組織の在り方、社会のあり方を問い直すことが可能になり、近代合理主義に貫かれた社会のひずみを見と直すことができる、ということがあるんじゃないかともいっています。

これらの担い手の問題は、女性学が、既存の学問領域と、どのように折り合いをつけていくのかという問題と、重なりあってきます。天野正子さんは、女性学のあり方としては、従来の学問分類にとらわれない新しい問題設定と方法論によって、独立した学問領域として成立しようという第一の立場、既存の学問領域のなかで、その学問の方法論を使いながら、視点としては女性学を導入するという第二の立場、いまはその学問に固有な方法論を使いながら、一方で独立の学問領域としての可能性をさぐるという、第一と第二の立場を統合する立場の三つの立場を提案しました。ただし、第三の立場は「あまりにも理想的すぎる」ので、検討の対象にはしません。

この議論は、そののちも続けられます。第一の立場を分離主義、第二の立場を統合主義と呼ぶとするならば、上野千鶴子さんは分離主義の戦略を主張していました。上野さんは、男を研究に引き入れるメリットとして、男を排除しないことで寛大さを表明できる、総合的な視野が得られるという理論的関心のほかに、社会的強者である男性を研究から排除するのは女性学の発展にとって不利であり、女性学の社会的評価を高めるためには「男もやる」ことが重要であるという実践的関心が大きいのではないかと述べています。しかしその一方で、既存の学問領域のなかで女性学をおこなうには、その学問内での政治にかかわらざるを得なくなり、またその領域の方法論を尊重しながら、その学問内に議論を位置づ

けなくてはなりません。上野さんはむしろ、女性学が無視できなくなるほど大きな領域になることによって、存在感を増していく戦略を肯定しました。上野さん自身も自分の専門の社会学とは違って、女性学は「趣味」であるといっていました。これは、肯定的な意味合いをもっていたと思いますが。

これに対し江原由美子さんは、既存の(社会学の)学問領域のなかで、男性を巻き込みながら、女性学を展開していく方向をとりました。天野自身も、女性学の視点が存在することは否定しませんが、「今」は女性学に固有の方法論はないので、統合主義の立場を選択することを暫定的に主張していました。

それでは、30年近くが経過した「今」はどうでしょうか。わたしは女性学のおかれている状況は、当時天野さんが、「理想的すぎる」と退けた第三の立場を超えてしまったのではないかと思います。上野、江原、天野さんはいずれも社会学者ですから、社会学にかぎっていえば、社会学において、女性の視点、「性」の視点の重要性が疑われることは、もうないと思います。それだけではなく、これら女性学の視点は、「ジェンダー」や「セクシュアリティ」といった研究領域をつくりだしています。日本社会学会でも、「性・世代」の部会はず数多くのパネルが作られ、多くの聴衆を集めています。

なによりも、女性学は、ジェンダーやセクシュアリティの理論を構築していく過程において、社会学の方法論自体を編みだして行きました。例えば現在社会学において大きな位置を占めている「構築主義」の方法論の精密化は、ジェンダー・セクシュアリティ理論抜きにはあり得なかったのではないかと思います(社会学の中心的なテーマである階層についても、10年に1度おこなわれるSSM調査——社会階層と社会移動全国調査：The national survey of Social Stratification and social Mobility——で、1995年は女性も調査対象者になりました。あまりに遅いですが、いちおう前進ではあります)。ですから、女性の視点は、新たな方法論を生み出す際の原動力となり、新しい方法論をつくりだすだけではなく、学問領域のなかに重要な研究対象として「女性学」の領域が作りだされ、そして学問領域を超えても「女性学」が成立するようになってきたといえるでしょう。分離主義か統合主義かという問いかけ自体が、無効になってきていると、わたしは思います。

4——女の論理とは

井上さんは、リブは、抽象化し、一般化し、一定の論理的秩序だてのかたちをとって考え、発言する「男の論理」に、抽象化、一般化を拒否して、あるがままの全体像があるがままに生のかたちで提出する「女の論理」を対立させます。花田清輝の、女の論理は、「論理(ロジック)」ではなく「修辞(レトリック)」であるという文章にヒントを得ながら、ウーマン・リブにおける「女の論理」とは、「女が自己の実存にのみ立脚して語る修辞」であり、女をめぐる既成の道徳の解体へと向かうものであると主張しています。

この井上さんの議論は、とても興味深いものです。わたしの専門の社会学はレトリカル

な学問でもありますから、レトリックは女の占有物だとは思いませんし、男がつねに論理的だとも思いませんが、「男の論理」への批判として、このような視点で「女の論理」を作り出すことは、面白いと思います。「女の論理」とは、「生産性の論理」である「男の論理」を批判することとの緊張関係によって成立するある種の論理といえるかもしれません。それではこの「男の論理」と「女の論理」の対立を、どう考えればいいのでしょうか。

ここで思い出すのが、上野さんが自分を男のことばと女のことばの「バイリンガル」であると自称していたことです。上野さんは高等教育を受けた自分を男仕立ての知を学んで、女のことばを男のことばに置きかえながら、男の言語を換骨奪胎してきたのだといいます。これは、ポストコロニアル研究でいわれる、「服従が抵抗であり、抵抗が服従であるような」というような実践です。

これらの論理の言語が、すべての経験を表すことができないからといって、女にとって不必要かといったら違います。その関係は、日本語と英語の関係に似ています。英語は確かに世界中の「共通言語」とされていることで、英語帝国主義が形成されています。英語を信奉し有難がるのが、その構造に絡めとられることだとしても、日本語しか知らなければ、英語帝国主義から逃れることになるかといったら、これも違います。英語の世界で何が行なわれているのか、それを知ろうと思えば、一度英語の世界に服従するしかないと思います。これは、英語を操り、変えていくための抵抗の始まりでもあります。英語を有難がる必要はないけれども、したたかに利用すべきであるのではないかと、わたしは思います。もちろん、英語を使用しているうちに、母語を忘れてしまっては元も子もありません。しかし「女の論理」が「男の論理」への対抗原理であり、この世界に住むかぎり、「男の論理」からも逃れることが不可能であるとしたら、ふたつの世界を行き来することによって、内側から「男の論理」を崩していくことが必要とされるのではないのでしょうか。

5—— 現代的課題

最後にこれら女性学をわたしたちが受け取って、どのような現代的課題があるのかについて触れたいと思います。

まず構築主義があります。構築主義によってジェンダーの理論が大きく前進し、またセクシュアリティも考察の対象となって——せまい意味でのアイデンティティの政治を超えるようなクリア理論などもでてきました。

フーコー、アルチュセール、オースティン、ブルデュー、バトラーなどの理論を使っていくことによって「主体」や「身体」や「戦略」、「自己決定」といった概念が再定義されていきました。本当に知的に面白いのですが、このような議論は実はリブの言説のなかに見出すことができます。書かれている言語の体系はまったく異なっているんですけどね。そこがわたしがリブに魅かれることのひとつでもあります。

また1990年代のフェミニズムの大きな焦点は、上野千鶴子さんが提唱した「フェミニズ

ムはナショナリズムを超えられるか？」という問題があります。日本人であることと女であることはどういう関係にあるのか、ということが、鋭く問われました。これは現代の「和解論争」にもつながる問題であって、決着はつかない問題です。

もちろん、「純粋な日本人」であるとか、「純粋な女」とか、そういうものは存在しません。「日本人」や「女」ということは「変数」のように操作的に分離できるものとして考えてはいけないと思います。わたしたちは「日本人の女」や「日本人の男」であり、純粋に「日本人」であったりすることはないのです。ポスト構造主義の理論的前進を踏まえれば、すべては「カテゴリー」であって、「変数」ではないのです。

これらの問題と同時に語られたのがポジショナリティ論ですが、ポジショナリティを「誰が語る資格があるのか」とか、「一番抑圧されている者のということがいちばん正しい」というように曲解してはいけません。誰にでも語る資格はあり、発言の内容の正しさは、そのひとの属性には還元されないのです。ただどのようにどのような場所で語られるのか、ということが発言の内容にともなって重要な問題であり、効果を及ぼすというように理解するべきだと思います。

簡単にではありましたが、女性学からフェミニズムの現代的な課題まで、ざっとみてきました。これからのさらなる女性学の発展を祈って終わりにいたします。

* 論旨には千田有紀『女性学／男性学』（2009年、岩波書店）との重複部分があります。